

叔父の袁隗との関係に注目し、袁紹の本心を指摘します。官渡以後、後継者あらそいは省略。

結論。劉虞を擁立しようと考えたのは、袁隗。袁紹は劉虞でなく、自分が皇帝になろうとした。これを言います。

## ■第1節 何進に就職

袁紹 字本初，汝南 汝陽人也。高祖父安，為漢司徒。自安以下 四世居三公位，由是 勢傾天下。

袁紹の祖先について。ぼくは『後漢書』で、もっと詳しく読んだので、ここはスルー。

○華嶠漢書曰…安 字邵公，好學 有威重。明帝時 為楚郡太守，治 楚王獄，所申理者 四百餘家，皆蒙全濟，安遂 為名臣。章帝時 至司徒，生 蜀郡太守京。京弟敞 為司空。京子湯，太尉。湯四子…長子平，平弟成，左中郎將，並早卒；成弟逢，逢弟隗，皆為公。

○魏書曰…自安 以下，皆博愛 容衆，無所揀擇；賓客 入其門，無賢愚 皆得所欲，為天下所歸。紹 即逢之庶子，術異 母兄也，出後 成為子。

袁安から歴代、袁氏は相手を選ばず付き合った、と。雑な総括だ。『後漢書』を読むと、そつでもないので。

○英雄記曰…成 字文開，壯健 有部分，貴戚權豪 自大將軍梁冀以下 皆與結好，言無不從。故京師 為作諺曰…「事不諧，問文開。」

袁成について『後漢書』は詳しくない。159年のあと、梁冀に連なり、荒淫して死んだんだと思う。

紹有姿貌 威容，能折節 下士，士多 附之，太祖 少與交焉。以大將軍掾 為侍御史，

○英雄記曰…紹生 而父死，二公愛之。

袁紹はおじたちに可愛がられた。袁術は、おじに媚びず、疎まれた。性格は長じても同じ、とか。笑

幼使為郎，弱冠 除濮陽長，有清名。

ぼくの推定。袁紹の20歳とは、165年。袁紹。何皇后が立つのが、同じ165年である。

遭母喪，服竟，又追 行父服，凡在塚 廬六年。禮畢，隱居洛陽，不妄通賓客，非海内知名，不得相見。

喪が明けたころ172年12月、叔父の袁隗が司徒に。面会を制限した理由は、叔父を頼る人がウザいから？

又好遊俠，與張孟卓、何伯求、吳子卿、許子遠、伍德瑜等 皆為奔走之友。

この5人については、詳しく追わねばなるまい。

不應辟命。中常侍趙忠 謂諸黃門曰…

「袁本初 坐作聲價，不應呼召 而養死士，不知此兒欲何所為乎？」

紹叔父隗 聞之，責數紹曰…「汝且破我家！」

紹於是 乃起 應大將軍之命。

本格的な就職は、何進に対してである。

○臣松之案…魏書雲「紹，逢之庶子，出後伯父成」。如此記所言，則似實成所生。

夫人追服所生，禮無其文，況於所後 而可以行之！二書 未詳孰是。

『英雄記』の父の喪を信じるなら、袁紹は袁逢の子ではない。袁逢は、178年に司空になるから。

廢人同然になった袁成が、167年から168年ごろまで、生きていたか。答えの出ない問いである。

稍遷中軍校尉，至司隸。

## ■2節 宦官を殲滅

靈帝崩，太后兄 大將軍何進 與紹 謀誅諸閹官，太后不從。

○續漢書曰…紹使客 張津說進曰…「黃門、常侍秉權日久，又永樂太后 與諸常侍，

專通財利，將軍 宜整頓天下，為海內除患。」進以為然，遂與紹結謀。

宦官の始末を言い出したのは、袁紹である。袁術は、あとから乗っかっただけ。

乃召董卓，欲以脅太后。

董卓を呼ぶ目的は、太后を脅すため。これを言い出し、何進に無理強いらしたのも、袁紹。

常侍、黃門聞之，皆詣進謝，唯所錯置。時紹勸進 便可於此決之，至於再三。

而進不許。令紹 使洛陽 方略武吏 檢司諸宦者。

又令紹弟 虎賁中郎將ノ術ヲシテ 選バシメ 温厚ナル 虎賁二百人ヲ，當入禁中，

代持兵 黃門陞守門戶。中常侍段珪等 矯太后命，召進入議，遂殺之，宮中亂。

袁術は、宦官の守備兵を、自分の兵を入れ替えようとした。感づかれて、失敗。

何進は太后に召されて、ホイホイ出ていった。なぜか。何進は、袁術が守備兵を交換済だと思ったのかな。バカ。

○九州春秋曰…初紹 説進曰…「黄門、常侍累世太盛、威服海内、前**竇武**欲誅之、而反為所害、但坐言語漏泄、以五營士為兵故耳。」

袁紹が、竇武が失敗した原因を説く。①機密漏洩、②使う兵の選択ミス。竇武の再挑戦という認識？

ちなみに竇武が殺された168年、第二次党錮の禁のとき、袁紹は喪中だった。

五營士生 長京師、服畏中人、而竇氏 反用其鋒、遂果叛走歸黄門、是以自取破滅。

竇武は洛陽で育った兵を使った。兵は宦官を懼れたから、失敗したのだよ、と。なるほど！

今將軍 以元舅之尊、二府 並領勁兵、其部曲將吏、皆英雄名士、樂盡死力、事在掌握、天贊其時也。今為天下 誅除貪穢、功勳顯著、垂名後世、雖周之申伯、何足道哉？今大行 在前殿、將軍 以詔書 領兵衛守、可勿入宮。」

大行＝靈帝の遺骸、らしい。何進は安全圏で兵を率いる。宮廷に入ってはいかん。

進納其言、後更狐疑。紹懼 進之改變、脅進曰…「今交構已成、形勢已露、將軍何為 不早決之？ 事留變生、後機禍至。」進不從、遂敗。

間違はなく「脅し」である。袁紹は、よほど強い信念があったようです。何進は、流されただけ。

術、將虎賁 燒南宮 嘉德殿 青瑣門、欲 以迫出珪等。

袁術が活躍している！袁術が狙っているのは、段珪である。宦官の主要メンバーも見ておきたいね。

珪等不出、劫帝 及帝弟陳留王 走小平津。紹既 斬宦者 所署司隸校尉許相、遂勒兵 捕諸閹人、無少長 皆殺之。或有 無須 而誤死者、至自髮露形體 而後得免。宦者或有 行善自守 而猶見及。其濫如此。死者二千餘人。

急追珪等、珪等悉赴河死。帝得還宮。

■3節 袁隗に仕込まれ、洛陽からの逃亡

董卓呼紹、議欲廢帝、立陳留王。是時紹叔父隗 為太傅、紹偽許之、曰…

「此大事、出當與太傅議。」

袁紹は「袁隗に聞いてくれ」と言う。どいう意味だろう？ ぼくの仮説で、袁隗は、劉虞を立てるつもりだ。袁紹にしてみれば、袁隗が思いついたことは、袁隗が実現すべきだ。自分でやればいい。

いま袁紹が董卓に「陳留王よりも、劉虞がいいよ」と言い、口論になるのは、割に合わない。

卓曰…「劉氏種 不足復遺。」紹不應，**橫刀 長揖而去。**

董卓に賛同しませんよ、という仄めかしか。正面から反対できないのが辛い。がんばれ。

○獻帝春秋曰…卓欲廢帝，謂紹曰…「皇帝沖闇，非 萬乘之主。陳留王**猶勝**，今欲立之。人有少智，大或癡，亦知復何如，為當且爾；卿不見靈帝乎？

念此令人憤毒！」

裴松之が、信憑性を疑う史料だ。ここで董卓は、漢のため、聡明な陳留王を選ぼうという。

董卓は、漢を滅ぼすとは言わない。董卓は、漢の忠臣じゃないか。笑

紹曰；「漢家 君天下**四百許年**，恩澤深渥，兆民戴之 來久。

今帝雖幼沖，未有不善宣 聞天下，公欲 廢適立庶，恐衆 不從公議也。」

卓謂紹曰…「豎子！**天下事豈不決我？** 我今為之，誰敢不從？ 爾謂董卓刀，為不利乎！」紹曰…「天下健者，豈唯董公？」引佩刀橫揖而出。

豎子と呼ばれた袁紹さんは、45歳。董卓は、もっと上なんだろうね。

○臣松之 以為。紹於時 與卓未構嫌隙，故卓 與之諮謀。若但 以言議不同，便罵 為豎子，而有 推刃之心，及紹複答，屈疆為甚。卓又安能 容忍而不及害乎？

且 如紹此言，進非亮正，退違詭遜，而顯 其競爽之旨，以觸哮闕之鋒，

**有志功業者，理豈然哉！** 此語，妄之甚矣。

裴松之は、袁紹と董卓は、決裂していないという。つまり、袁紹が洛陽を出た理由が、別に必要だ。きっと叔父の袁隗に命じられ、劉虞を擁立しにいった。あとで詳述。

紹既出，遂亡 奔冀州。**侍中周諮、城門校尉伍瓊、議郎何顥等**，皆名士也。

卓信之，而**陰為紹**，乃說卓曰…

「夫廢立大事，非常人所及。紹不達大體，恐懼故出奔，**非有他志也。**」

今購之急、勢必為變。袁氏樹恩四世、門世故吏遍於天下、若收豪傑以聚徒衆、英雄因之而起、則山東非公之有也。不如赦之、拜一郡守、則紹喜於免罪、必無患矣。」卓以為然、乃拜紹勃海太守、封□□侯。

袁紹は弁護してもらった。「他志はないんだよ」と。良かったね…。だが、注意すべきだ。

仲間の名士は、袁紹を説明する必要があった。つまり袁紹が、理由を明らかにせず、出奔したことを意味する。董卓は、名士を畏れた。万一、意見が違っても、董卓は、袁紹をカンタンに殺さないはずなのに。

紹遂以勃海起兵、將以誅卓。語在武紀。紹自號車騎將軍、主盟、與冀州牧韓馥、立幽州牧劉虞為帝。遣使奉章詣虞、虞不敢受。

ぼくは、劉虞を皇帝に立てようとしたのは、袁隗だと思う。

袁紹は、袁隗の指示で、劉虞を立てるため、洛陽から出て行った。董卓に殺されそうになったからではない。なぜ袁氏がゆかりのない渤海に行ったか。劉虞がいるからだ。

#### ■ 4節 叔父・袁隗からの独立し、冀州を奪う

後馥軍安平、為公孫瓚所敗。瓚遂引兵入冀州、以討卓為名、内欲襲馥。

公孫瓚は、董卓を討つことよりも、韓馥から冀州をとることに関心がある。

公孫瓚は、帝位のような難しい話より、もっと現実的な男で、領土経営に関心があるんだろう。

馥懷不自安。

○英雄記曰…逢紀說紹曰…「將軍舉大事而仰人資給、不據一州、無以自全。」

紹答雲…「冀州兵強、吾士饑乏、設不能辦、無所容立。」

紀曰…「可與公孫瓚相聞、導使來南、擊取冀州。公孫必至而馥懼矣、因使說利害、為陳禍福、馥必遜讓。於此之際、可據其位。」紹從其言而瓚果來。

公孫瓚と結び、韓馥を攻める。こんなこと、袁隗が指示していないだろう。袁紹が、袁隗に齒向かい始めた。

叔父の故吏をやっつけ、袁紹は、叔父から自立するつもりだ。

會卓西入關、紹還軍延津、因馥惶遽、使陳留高幹、潁川荀諝等說馥曰…

「公孫瓚乘勝來向南、而諸郡應之、袁車騎引軍東向、此其意不可知、

竊為將軍危之。」馥曰…「為之奈何？」

諶曰…「公孫提燕、代之卒、其鋒不可當。袁氏、一時之傑、必不為將軍下。

韓馥が袁氏を信賴するのは、おそらく袁隗に取り立てられたから。袁紹ではない。袁紹は、叔父の配った恩を、だましの道具に利用した。もし袁紹が韓馥に感謝されていたら、こんなだまし討ちは不要だ。

夫冀州、天下之重資也、若兩雄並力、兵交於城下、危亡可立而待也。夫袁氏、

將軍之舊、且同盟也。當今為將軍計、莫若舉冀州以讓袁氏。

「あなたのために」と連呼する。怪しい。そして「袁紹」でなく「袁氏」に譲れと、説得するのも注意。

袁氏得冀州、則瓚不能與之爭、必厚德將軍。冀州入於親交、是將軍有讓賢之名、而身安於泰山也。原將軍勿疑！」馥素恇怯、因然其計。

馥長史耿武、別駕閔純、治中李膺諫馥曰…

「冀州雖鄙、帶甲百萬、谷支十年。袁紹孤客窮軍、仰我鼻息、

譬如嬰兒在股掌之上、絕其哺乳、立可餓殺。奈何乃欲以州與之？」

袁紹は、保育なくば、すぐに死ぬ乳児だと。袁紹は、叔父・袁隗の方針に逆らった。叔父の支援は、打ち切りだ。袁紹は、後ろ盾のない冀州で、ウロウロしてる。まさに孤児と同じ。適切な比喻である。

馥曰…「吾、袁氏故吏、且才不如本初、度德而讓、古人所貴、諸君獨何病焉！」

從事趙浮、程奐請以兵拒之、馥又不聽。乃讓紹。

次の裴注は、韓馥が防衛した話。韓馥にも、立派な部将がいたことを表す。地図で戦局を追いたいな。

○九州春秋曰…馥遣都督從事趙浮、程奐將強弩萬張屯河陽。

浮等聞馥欲以冀州與紹、自孟津馳東下。時紹尚在朝歌清水口、浮等從後來、船數百艘、衆萬餘人、整兵鼓夜過紹營、紹甚惡之。浮等到、謂馥曰…

「袁本初軍無鬥糧、各已離散、雖有張楊、於扶羅新附、未肯為用、不足敵也。

渤海の浮き草である袁紹には、張楊と於夫羅しか、味方がいない。しかも彼らも「新たに付いた」状態。

小從事等請自以見兵拒之、旬日之間、必土崩瓦解、明將軍但當開閣高枕、

何憂何懼！」馥不從、乃避位、出居趙忠故舍。

遣子贛冀州印綬於黎陽與紹。紹遂領冀州牧。

■5節 沮授による、天下統一プラン

從事 沮授、説紹曰：「將軍 弱冠登朝、則播名海内；值廢立之際、則忠義奮發；

たしかに袁紹は「劉弁をやめて劉協に」とも「劉弁をやめて劉虞に」とも言っていないんだ。笑

單騎出奔、則董卓懷怖；

濟河而北、則勃海稽首。振一郡之卒、撮冀州之衆、威震河朔、名重天下。

雖黃巾猾亂、黑山跋扈、舉軍東向、則青州可定。還討黑山、則張燕可滅；回衆北首、

則公孫必喪；震脅戎狄、則匈奴必從。橫大河之北、合四州之地。

收英雄之才、擁百萬之衆、迎大駕於西京、複宗廟於洛邑、號令天下、以討未復、

以此爭鋒、誰能敵之？比及數年、此功不難。」

沮授の作戦では、献帝を迎えろと言っている！劉虞は無視。やはり劉虞は、袁紹の積極的な作戦ではなかったな。

紹喜曰：「此吾心也。」即表 授為監軍、奮威將軍。

○獻帝紀曰：沮授、廣平人、少有大志、多權略。仕州別駕、舉茂才、曆二縣令、

又為韓馥別駕、表拜 騎都尉。袁紹得冀州、又辟焉。

○英雄記曰：是時 年號初平、紹字本初、自以為 年與字合、必能克 平禍亂。

■6節 親戚を殺した、王匡の苦惱

卓遣 執金吾胡母班、將作大匠吳脩 齎詔書口紹、紹使 河内太守王匡 殺之。

袁紹は王匡に、董卓の遣いを殺させた。えぐいな。王匡は、はじめに董卓に拳兵した人。董卓伝にある。

○漢末名士録曰：班 字季皮、太山人、少 與山陽度尚、東平張邈等八人、  
並輕財赴義、振濟人士、世謂之八廚。

度尚について、調べねば。張邈は、袁紹と曹操の友だち。みんな仲間である。

○謝承後漢書曰：班、王匡之妹夫、董卓 使班奉詔 到河内、解釋義兵。

匡受 袁紹旨。收班系獄、欲殺之 以徇軍。班與匡書雲…

義理の兄弟を、殺さなければならぬ。董卓が狙って、近親をぶつけたのだが。関東の兵は解散するか？

「自古以來、未有下土諸侯舉兵向京師者。

ちくま訳。地方の諸侯が拳兵して、都に攻め上った（成功例となる）者はおりません。

劉向傳曰『擲鼠忌器』、器猶忌之、況卓今處宮闕之内、以天子為藩屏。

幼主在宮、如何可討？僕與太傅馬公、太僕趙岐、少府陰脩俱受詔命。關東諸郡、

雖實嫉卓、猶以銜奉王命、不敢玷辱。而足下獨囚僕於獄、欲以釁鼓、

此悖暴無道之甚者也。僕與董卓有何親戚、義豈同惡？

董卓は不正。でも董卓を糾弾して、拳兵するのも不正。長いものに巻かれるのが、朝廷を守る道だ。一理ある。

而足下張虎狼之口、吐長悖之毒、恚卓遷怒、何甚酷哉！

死、人之所難、然恥為狂夫所害。若亡者有靈、當訴足下於皇天。

夫婚姻者禍福之機、今日著矣。曩為一體、今為血仇。亡人子二人、則君之甥、

身沒之後、慎勿令臨僕屍骸也。」匡得書、抱班二子而泣。班遂死於獄。

董卓と袁紹の戦いは、単純な東西対立ではない。国境あたりで、引き裂かれた人もいる。

## ■ 7節 袁隗が董卓に殺される

卓聞紹得關東、乃悉誅紹宗族太傅隗等。

もし袁紹が、袁隗と親しければ、なぜ関東で自立するか。さきに叔父を逃がすだろう。

袁紹は、袁隗を生贄に、関東で自立するつもりだ。食わせモノの袁隗ですが、おいの袁紹に、たばかられました。

當是時、豪俠多附紹、皆思為之報、州郡並起、莫不假其名。

「その名を仮る」とある。袁隗の死は、名目である。袁紹は、同情と名分を得るため、董卓に叔父を殺させた？

袁紹は、叔父が指示した、劉虞の奉戴に熱心でなかったし。

馥懷懼、從紹索もとメ去、往依張邈。

韓馥は、袁隗に恩があるから、袁紹に冀州をあげた。だが、いま韓馥は、袁紹が袁隗を「殺した」と感づいた！

○英雄記曰…紹以河内朱漢為都官從事。漢先時為馥所不禮、内懷怨恨、

且欲邀迎紹意、擅發城郭兵圍守馥第、拔刃登屋。馥走上樓、收得馥大兒、



槌折兩口。紹亦立收漢，殺之。馥猶憂怖，故報紹素去。

韓馥がきらいな朱漢は、袁紹に迎合して、韓馥を攻めた。袁紹は、名声が落ちるのを恐れ、朱漢を殺した。ほんとうは袁紹は、韓馥を殺したかった。でも、評判を落とす殺し方はいけない。微妙だ。

後紹遣使詣邈，有所計議，與邈耳語。馥在坐上，謂見圖構，無何起至溷自殺。

■ 8節 袁紹が公孫瓚から、冀州を守る

裴注だけで、1節にしてみました。

○英雄記曰…公孫瓚 擊青州黃巾賊，大破之，還屯廣宗，改易守令，冀州長吏無不望風回應，開門受之。

公孫瓚が来ると、冀州の役人は、悦んで降伏した。袁紹のペテンを見抜き、韓馥の死を責めている。

この戦いは、袁紹が本拠地を維持できるかの瀬戸際。見落としがちですが、重要なのです。

紹自往征瓚，合戰于界橋南二十裏。瓚歩兵三萬餘人為方陳，騎為兩翼，左右各五千餘匹，白馬義從為中堅。

紹令麴義以八百兵為先登，強弩千張夾承之，紹自以歩兵數萬，結陳於後。

義久在涼州，曉習羌鬥，兵皆驍銳。瓚見其兵少，便放騎欲陵蹈之。

戦いの経緯は、ザクッと省略。つぎは、袁紹の必死ぶりを。これは根拠地を守る戦い。曹操の兗州に等しい。

便圍紹數重，弓矢雨下。別駕從事田豐扶紹欲卻入空垣，紹以兜鍪撲地曰…

「大丈夫當前鬥死，而入牆間，豈可得活乎？」強弩乃亂髮，多所殺傷。

袁紹さんは、ここで負けたら、あとがない。だから死もいとわない。

○英雄記曰…初平四年，天子使太傅馬日磾、太僕趙岐和解關東。

献帝に従うのが、秩序を回復させる、最短ルートだ。「和解」すべき。

岐別詣河北，紹出迎於百里上，拜奉帝命。岐住紹營，移書告瓚。

以下、公孫瓚は、仲直りする気持ちである。

瓚遣使具與紹書曰…「趙太僕以周召之德，銜命來征，宣揚朝恩，示以和睦，

曠若開雲見日，何喜如之？昔賈複、寇恂亦爭士卒，欲相危害，遇光武之寬，親俱陛見，同輿共出，時人以為榮。自省邊鄙，得與將軍共同此福，此誠將軍之眷，而瓚之幸也。」魏義後恃功而驕恣，紹乃殺之。

公孫瓚は、献帝に従えという。袁紹は聞かない。袁紹は冀州で自立して、皇帝になりたいのだから。

■9節 献帝を取り逃がす

初、天子之立、非紹意、及在河東，紹遣潁川郭圖使焉。

圖還說紹迎天子都鄴，紹不從。

○獻帝傳曰…沮授說紹雲…「將軍累葉輔弼，世濟忠義。今朝廷播越，宗廟毀壞，觀諸州郡外託義兵，內圖相滅，未有存主恤民者。且今州城粗定，宜迎大駕，安宮鄴都，挾天子而令諸侯，畜士馬以討不庭，誰能禦之！」紹悅，將從之。

沮授は、献帝を迎えろという。いちど袁紹も、賛成した。

郭圖、淳於瓚曰…「漢室陵遲，為日久矣，今欲興之，不亦難乎！」

且今英雄據有州郡，衆動萬計，所謂秦失其鹿，先得者王。若迎天子以自近，動輒表聞，從之則權輕，違之則拒命，非計之善者也。」

郭圖と淳于瓚は、献帝を近くに置いたら、袁紹が思いどおりにできなくなるよと言つ。

授曰…「今迎朝廷，至義也，又於時宜大計也，若不早圖，必有先人者也。」

夫權不失機，功在速捷，將軍其圖之！」紹弗能用。

沮授さん、郭圖さんの名前を口にしてしまったよ。郭圖は、自分が呼ばれたと思ってドキツとしたはず。

袁紹は、献帝を迎えず。献帝が飢え死にしてくれたほうが、都合がよい。だが自分では殺せない。放置だ。

會太祖迎天子都許，收河南地，關中皆附。紹悔，欲令太祖徙天子，

都鄴城以自密近，太祖拒之。

袁紹が献帝をどうしてやりたいかは別にして、いまの献帝の影響力は、本物である。関中が従ったから。

天子以紹為太尉，轉為大將軍，封鄴侯。

○獻帝春秋曰…紹恥班在**太祖下**，怒曰；「曹操當死數矣，我輒救存之，今乃背恩，挾天子以令我乎！」太祖聞，而以大將軍讓于紹。紹讓侯不受。

命を救われ、立場の弱い曹操が、袁紹に対抗した。獻帝を手に入れた効果の、最たるものである。怒るなよ。

## ■10節 皇帝、袁紹

頃之。擊破**瓚**于易京，並其衆。

○典略曰…自此紹貢禦希慢，私使主簿**耿苞**密白曰…

「赤德袁盡，**袁為黃胤**，宜順天意。」紹以苞密白事**示**軍府將吏。

議者鹹以苞為妖妄宜誅，紹乃殺苞以自解。

袁紹は、皇帝になりたい！（何回も書いているが、今回のテーマです）

耿苞に王朝の交代を説かせ、それを「示」したのは、袁紹である。いま支持が得られたら、

皇帝を名乗るつもりだ。ミスったから、バツの悪さを消すため、耿苞に罪を着せた。死人に口なし。

「袁紹は劉虞を皇帝にしたい」が通説だ。それにしても、劉虞を早く諦めすぎだ。袁紹らしくない。

劉虞を推したのは袁隗。袁隗に逆らい、袁隗を利用したのは、袁紹。これで、筋が通ると思っっています。

袁紹と袁術は、不仲だ。1本の砂浜のポールを奪い合っているから、不仲なんだ。

袁術が最期に「袁紹に帝位を譲る」と言い出す。袁術の妄言でない。少なくとも袁紹と、噛み合っている。

○九州春秋曰…紹延徵北海**鄭玄**而不禮。

**趙融**聞之曰…「賢人者，君子之望也。不禮賢，是失君子之望也。」

夫有為之君，不敢失萬民之歡心，況於君子乎？失君子之望，難乎以有為矣。」

袁紹の失敗エピソードだ。鄭玄って、あの鄭玄か？

出長子譚為青州。

沮授諫紹…「必為禍始。」紹不聽，曰…「孤欲令諸兒各據一州也。」

○九州春秋載授諫辭曰…「世稱一兔走衢，萬人逐之，一人獲之，貪者悉止，分定故也。且年均以賢，德均則卜，古之制也。原上惟先代成敗之戒，

下思逐兔分定之義。」

1匹のウサギは、みなが追う。ウサギが誰かに捕まれば、みな諦める。持ち主が明確でないと、争いが起きる。紹曰…「孤欲令四兒各據一州，以觀其能。」

袁紹は、すっかり天下人の心地である。皇帝は、外敵に、気を取られすぎることはない。

授出曰…「禍其始此乎！」

譚始至青州，為都督，未為刺史，後太祖拜為刺史。其土自河而西，

蓋不過平原而已。遂北排田楷，東攻孔融，曜兵海隅，是時百姓無主，欣戴之矣。

袁譚の治めぶりが描かれますが、省略。

又以中子熙為幽州，甥高幹為並州。衆數十萬，以審配、逢紀統軍事，

田豐、荀諝、許攸為謀主，顏良、文醜為將率，簡精卒十萬，騎萬匹，將攻許。

## ■ 11節 沮授の悲劇

沮授と田豐が、袁紹を諫めた。南下し、曹操を攻める時期ではないと。

○獻帝傳曰…紹將南師，沮授、田豐諫曰…「師出歷年，百姓疲弊，倉庾無積，

賦役方殷，此國之深憂也。宜先遣使獻捷天子，務農逸民；若不得通，

乃表曹氏隔我王路，然後進屯黎陽，漸營河南，益作舟船，繕治器械，分遣精騎，

鈔其邊鄙，令彼不得安，我取其逸。三年之中，事可坐定也。」

沮授と田豐は、常識的な意見である。河北に留まり、獻帝を手中に収めれば勝てる。ほぼ成功する。

だがこれでは、袁紹が皇帝になれない。「獻帝を手元に置き、禪讓させる」なんて奇抜なことを、やる以外は。

石井仁氏は、河北から南下して天下をとるのは、光武帝の前例があったと言った。袁紹は、マネたいのだ。

ついでに言つと、袁術も光武帝をマネた。光武帝が拳兵した南陽郡を、はじめの拠点にした。似た兄弟なんだ。

○獻帝傳曰…審配、郭圖曰…「兵書之法，十圍五攻，敵則能戰。今以明公之神武，

跨河朔之強衆，以伐曹氏。譬若覆手，今不時取，後難圖也。」

審配と郭図が、どこまで袁紹の本意を知っているか不明。袁紹が南下したいといったから、迎合しただけか。

迎合の証拠に、審配と郭図の発言には、内容がない。ぼくでも言えることしか、言っていない。

授曰…「蓋救亂誅暴，謂之義兵；恃衆憑強，謂之驕兵。兵義無敵，驕者先滅。

**曹氏迎天子**，安宮許都，今舉兵南向，於義則違。且廟勝之策，不在強弱。

曹氏法令既行，士卒精練，非公孫瓚坐受圍者也。今棄萬安之術，而興無名之兵，竊為公懼之！」

圖等曰…「武王伐紂，不曰不義，況兵加曹氏而雲無名！」

且公師武臣竭力，將士憤怒，人思自聘，而不及時早定大業，慮之失也。

夫天與弗取，反受其咎，此越之所以霸，吳之所以亡也。監軍之計，計在持牢，而非見時知機之變也。」紹從之。

面白い。曹操を攻めるなという沮授たちは、現状を分析する。攻めろという郭図は、故事を引くだけ。

どちらが頼るべき意見かは、明白である。

圖等 因是譖授「監統内外，威震三軍，若其浸盛，何以制之？」

夫臣與主不同者昌，主與臣同者亡，此黃石之所忌也。且禦衆於外，不宜知内。」

**紹疑焉。**乃分監軍為三都督，使授及郭圖、淳於瓊各典一軍，遂合而南。

先是，太祖遣劉備詣徐州拒袁術。術死，備殺刺史車胄，引軍屯沛。

袁術は、曹操から徐州を奪い、青州や冀州と結ぶつもりだった。だが途中で死んだ。

もとの袁術の戦略を、劉備が乗っ取った。劉備は、袁術の戦略を、自分で演じた。徐州で、曹操に離反した。

紹遣騎佐之。太祖遣劉岱、王忠擊之，不克。

建安五年，太祖自東征備。田豐說紹襲太祖後，紹辭以子疾，不許。

袁紹は、袁術なら助けるつもりだった。だが劉備なんて、助ける義理がない。

「曹操を攻める」好機でなく、「劉備を守る」必要がないと思っただろう。

豐舉杖擊地曰…「夫遭難遇之機，而以嬰兒之病失其會，惜哉！」

田豐がツエを持っているから、ジジイに描かれるんだろうか。

太祖至，擊破備；備奔紹。

(今回は「」まで)